通常学級の学習場面における相互依存型集団随伴性の適用

―学級全児童の相互交渉の変容にともなう学業成績への派生効果の検討―

○岩本佳世[1,2]　野呂文行[3]

[1]筑波大学大学院人間総合科学研究科　[2]日本学術振興会　[3]筑波大学人間系

KEY WORDS：相互依存型集団随伴性，通常学級，学業成績

Ⅰ．問題と目的

通常学級の全児童の行動面にアプローチをして、学業成績への派生効果を検討した研究として、Weis, Osborne, and Dean（2015）がある。Weis et al.（2015）の相互依存型集団随伴性のプログラムには、援助報告（Skinner, Cashwell, & Skinner, 2000）の手続きが含まれていた。援助報告に対する相互依存型集団随伴性を導入することによって、学級全児童の援助報告数は増加することが示されている（例えば、Cashwell, Skinner, & Smith, 2001）。学習内容に関連する援助報告に対する相互依存型集団随伴性を導入することによって、学級全児童の学習内容の理解は促進されることが予測される。そこで本研究では、通常学級の学習場面において、学習内容に関連する援助報告に相互依存型集団随伴性を導入し、学級全児童の援助報告をした児童の割合が増加するかどうかを検討することを第一の目的とした。第二の目的として、学級全児童の援助報告数の増加にともない、学級内で低成績の児童たちの学業成績への派生効果を検討した。

Ⅱ．方法

１．参加者

公立小学校の通常学級５年生の児童 29 名（男児 15 名、女児 14 名）とその担任教師であった。

２．実施期間と支援場面

実施した期間は、X 年９月から X＋1 年２月であった。支援した場面は、通常学級の学習場面（漢字テストの時間）であった。

３．目標の行動

目標の行動は、学習内容に関連する援助報告を付箋紙に書くこと（以下、援助報告とする）であった。

４．手続き

1）　ベースライン（以下、BL とする）

BL 期を導入する前に、担任が全児童に対して援助報告と支援内容についての説明を行った。

2）　相互依存型集団随伴性

漢字テストの後に、担任が各班に援助報告の記録用紙を配布し、児童が担任の机に記録用紙を提出した。4～5 名 1 班に関して、4～5 点で児童が記録した。その児童の記録に基づいて担任が評価し、班全員が援助報告をした場合に、班全員にシールが渡された。学級全員が援助報告をした場合は、学級全員にスペシャルシールが渡された。

3）　プローブ

BL 期と同じ条件であった。

５．学業成績の評価

29 名の児童のうち、3 名（特別なニーズのある児童）を除いた 26 名の児童を BL 期の成績に基づいて高成績群と低成績群に分けた。低成績群は、BL 期において 10 点満点のテストで平均８点以下の７名の児童を示す。各条件で平均８点以上の低成績群の児童の人数を測定した。

６．実験デザイン

AB+プローブデザインを用いて、相互依存型集団随伴性の効果を検討した。

７．倫理的配慮

本研究は、研究の説明を第一著者が実施した上で学校長、担任から、書面により本研究参加への同意と掲載の了解を得た。また、対象学級の保護者会で、第一著者が保護者に対して本研究への協力についての説明を行い、学級全児童の保護者からの本研究への参加に対する同意と掲載の了解を口頭で得た。

Ⅲ．結果と考察

学級全児童の援助報告をした児童の割合を Fig.1 に示した。低成績群の児童の学業成績への派生効果（平均８点以上の低成績群の児童数）を Fig.2 に示した。

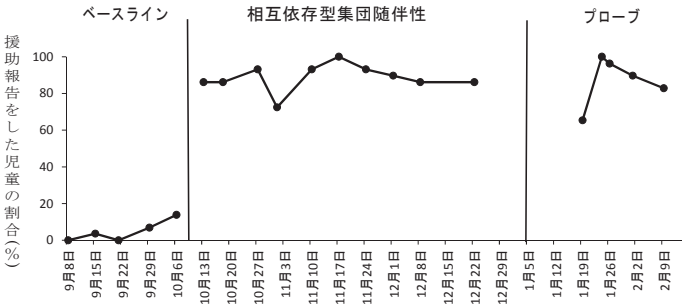

Fig.1 学級全児童の援助報告をした児童の割合（%）

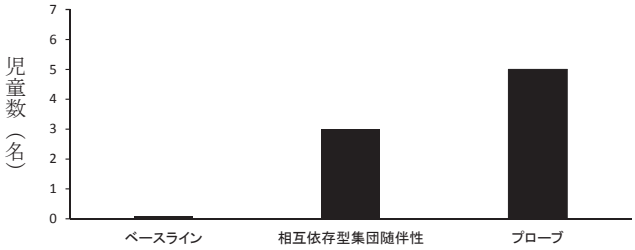

Fig.2 平均８点以上の低成績群の児童数（名）

援助報告に対する相互依存型集団随伴性を導入することによって、学級全児童の援助報告をした児童の割合は増加した（Fig.1）。この結果は、先行研究（Cashwell et al., 2001；Skinner et al., 2000）の結果を支持するものであった。学級全児童の援助報告数の増加にともない、低成績群の児童の学業成績への派生効果が示されることが明らかとなった（Fig.2）。本研究の結果から、通常学級の学習場面において、学習内容に関連する援助報告に対する相互依存型集団随伴性に基づく支援は、児童の行動と学業に有効である可能性が示された。

（IWAMOTO Kayo & NORO Fumiyuki）